
そしてそれは青春で 4 というFINAL

黒崎ろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そしてそれは青春で4というFINAL

【Nコード】

N5080BA

【作者名】

黒崎ろっ

【あらすじ】

この物語の主人公たる少年も恐らくは青春を経験するのだろう。

ただ、他の人とはちょっとだけ違う青春かもしれないし、そうではないかもしれない。

そんな話です。

「巻」目覚め（前書き）

ついに4に突入です。

このまま最後まで突っ走りまする！

では、どうぞ。

「巻」目覚め

真つ暗な闇の中をさまようような、たゆたうような不思議な感覚。

それが混濁した意識の中で見た夢、に近いものである事に気付くのは、その闇の終わり、つまり意識が覚醒した時の事だった。

「……」

いやに重いまぶたをこじ開け、うつすら広がる外の様子に目を凝らす。

茶色。木。横になっている俺。ベッド。家。

覚醒しきらぬ頭では視界が捉える情報を単体でしか捉えられない。

少なくとも言えるのは、そこが俺にとって馴染みのある場所ではなかったということ。

いや、待てよ。俺にとって馴染みのある光景ってなんだ？

そもそも……俺は……。

俺は起きたての頭で思考を巡らす。いや、正確には巡らそうとしていた。

しかしそれはどたとたと走ってくる足音により中断させられた。

「あー目が覚めたんだね！良かったー。気分はどう？」

明るいきはきとした声。

俺がその声の方に顔を向けると、声の雰囲気にとびつたりの明るい笑顔を浮かべた女の子が俺の枕元に座っていた。

「……」

俺は何か言葉を返すべきとは分かっていたが、しかし言葉はついに俺の口からは出なかった。

何を言えば、俺を表現出来るか分からなかったから。

「あー、目が覚めたばかりでぼーっとしてるのかな？でもね、何かあったら遠慮なく言ってね？」

女の子は、恐らく不審な顔つきになっているであろう俺にそう声を掛けてくれた。

「ここは私の家。神社なんだけどね。というか自己紹介しなくちゃね！私の名前は笹倉羽月^{ささくら はづき}。もしよかったらあなたの名前も教えてほしいな」

女の子。明るい茶髪のショートカットを揺らしながら羽月はちゃんと小首をかしげる。

名前。名前……。

俺は、数瞬の間の後、こう切り出した。

「俺は、誰？」

記憶喪失。小説やドラマなんかでは品頻繁に使われる設定だが、実際になる確率はごく稀の中の稀、と言えるだろう。

そんな稀の中に、俺はいた。

自分に関する事がなにも思い出せない。名前も、住所も、家族の名前も顔も。全て思い出せない。

「……………あ、あああああああつあつあつあつあ！！」

頭の中が空っぽなのに、なのにすごく重い。怖い、怖すぎる。なんでこんなに重いんだよ！！

僕はがばつと半身を布団から起こし、そのやり場のない衝動を両手を頭に添える事で抑えようとする。

だが俺を俺たらしめるものを奪ったその闇は、ちょっとやさっとじや治まらない。むしろじわじわ広がるうとすらしている。

だめだ。自分が、自分が……。

「大丈夫だよ」

その時、ふわりと俺の頭が温もりに包まれる。

羽月が、俺の事を抱きしめていた。

「大丈夫。私がいるから。だから落ち着いて」

まるで母親が赤ちゃんをあやすような、どこか懐かしい優しい声。

俺は、なんとか最悪のパニックの状態は脱し、落ち着いて羽月の顔を見れるまでになった。

「大丈夫？」

羽月は笑顔で聞いてくる。

「……うん」

俺は静かに頷いた。

「追々話すつもりだったんだけどね。君は川岸に打ち上げられていたんだよ」

「俺が……川に？」

川というものは分かる。しかしそこに俺を結びつける記憶が無い。

「荷物もなにも持って無くてね。だから身元の確認もなにも出来なかったからじいちゃんと二人でとにかくうちに連れてきたんだ」

何も荷物を持っておらず、しかも本人は記憶喪失。状況は最悪なようだ。

「じいちゃんを呼んでくるから待っててね。……あ、そういえばポケットにこの紙だけ入ってたんだ。なんかのヒントになるかもしれないから渡しておくね」

そう言って羽月はくしゃくしゃの紙を渡してくれる。

その紙には、四文字の、名前が書かれていた。

『高柳浩輔』

「これ人の名前だよね？なんか覚えてる？」

「いや……」

なにも思い出しはしなかった。

でも、確実に心に引く掛かるものはあった。

絶対に忘れてはいけない何かが。

「巻」目覚め（後書き）

こいつは誰だ？

本当に誰だ？

では次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5080ba/>

そしてそれは青春で4というFINAL

2012年1月14日00時55分発行